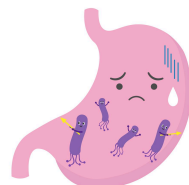


萎縮性胃炎と逆流性食道炎

■ 萎縮性胃炎とは

萎縮性胃炎とは、胃の粘膜が長いあいだ炎症を受けることで薄くなり、胃の働きが弱くなっている状態をいいます。

主な原因はピロリ菌感染で、感染が長期間続くと胃粘膜に慢性炎症が起こり、次第に萎縮が進みます。萎縮性胃炎はゆっくり進行し、**自覚症状がほとんどないことが多いのが特徴**です。気づかないうちに進むことがあるため、定期的な胃カメラ検査が大切です。



■ 胃カメラ検査が必要な理由

萎縮性胃炎の状態では、胃がんが発生しやすい環境になっているといわれています。胃カメラでは次の点を直接確認できます。

- 胃粘膜の萎縮の程度
- ピロリ菌感染の有無
- 炎症やびらんの状態

ピロリ菌が見つかった場合は、1週間の内服による除菌治療を行います（**成功率は約80%**）。バリウム検査も有用ですが、胃カメラは粘膜を直接観察できるため、より精度の高い診断が可能です。

■ 逆流性食道炎とは

逆流性食道炎とは、胃酸が食道へ逆流することで食道の粘膜が傷つき、炎症が起こる病気です。炎症が続くと粘膜が変化し、**食道がんのリスクが高まる**ことがあります。

主な症状は次のとおりです。

- 胸やけ
- 酸っぱい液体（胃酸）がこみ上げる
- のどのつかえ感
- 原因不明の咳



■ 胃カメラ検査が大切な理由

胃カメラでは、食道や胃の粘膜の状態を直接観察することができ、炎症の程度や合併症の有無を早期に確認できます。

逆流性食道炎と診断された場合は、胃酸の分泌を抑える薬を内服することで、粘膜の傷の改善や症状の軽減、将来的ながんリスクの軽減が期待できます。

症状が気になる場合や、健康診断で異常を指摘された場合には、早めの胃カメラ検査をおすすめします。